変奏曲「キーウの鳥の歌」――― 作曲と分析

吉　川　和　夫
（学長）

１．はじめに

変奏曲「キーウの鳥の歌」は、「仙台クラシックフェスティバル2022」のプログラムとして行われた「伊藤圭クラリネット・リサイタルⅣ」の演奏曲目として、クラリネット奏者伊藤圭氏、ピアニスト榊原紀保子氏からの委嘱に応じて作曲した作品である。本稿では、作品成立に至る過程と作曲の意図を述べ、作品の楽曲分析を試みる。

２．作品の成立過程と意図

榊原氏を通じて、伊藤氏からの作曲依頼をメールで受け取ったのは2022年3月13日、同16日に受諾の返信を送り、3月から8月にかけて作曲された。8月14日に完成した楽譜を送付した。初演は、2022年10月1日、伊藤、榊原両氏によって、仙台市太白区文化センター展示ホールにて行われた。作曲依頼の日付を記したのは、この時期の社会情勢が大きく関わっているためである。

2022年2月24日、ロシアによるウクライナ侵攻が開始され、世界を震撼させているさなかでの作曲委嘱であった。音楽作品は、社会的な出来事を映しだすものではなく、音楽は芸術という名の美の下でのみ輝く、音楽はそれ以上でも以下でもないという考え方は正しい。多くの音楽作品は、社会情勢や作曲家個人の周辺とは無関係に作られる。しかし、音楽の創り手である作曲者は、生身の人間でいる以上、生きる時代と無縁でいるわけにはいかないということもまた、揺るがない真実である。歴史に残る作品で、作曲者自身が置かれた社会状況が作品に反映された例として、20世紀ソヴィエト連邦の作曲家ドミートリイ・ショスタコーヴィチ（Dmitry Shostakovich 1906～1975）の名前をあげておく。

侵攻に至る経緯や歴史的評価はさておき、筆者は作曲家として、侵攻された国の人々に寄り添う姿勢を書き留めたいと願った。そのために、ウクライナに因んだ旋律の変奏曲を作曲することを考えた。

ウクライナに因んだ楽曲として、変奏曲の主題として選んだのは、「キーウの鳥の歌」で、オレクサンドル・ビラシュ（Oleksandr Bilash 1931～2003）作曲による歌曲である。以下、ウェブページ（参考文献参照）を参考に、「キーウの鳥の歌」について、簡単に記しておく。

オレクサンドル・ビラシュは、ウクライナとソヴィエト連邦で活動した作曲家で、オペラ、オペレッタ、オラトリオ、映画音楽等のほか、抒情的なポピュラーソングの作者として知られ、ウクライナとソヴィエト連邦の両方から人民芸術家の称号を授けられている。作詞者Yevhen Hutsalo（1937～1995）は、ウクライナの作家、ジャーナリストである。1984年に、北海道合唱団を中心とした合唱訪問団がウクライナの首都キエフを訪れた際、歓迎会で現地の人たちによって歌われた曲を、同訪問団が日本に持ち帰ったとされる。現在は、北海道合唱団の指揮者であった木内宏治訳詞による「キエフの鳥の歌」というタイトルで歌われているが、原曲は「ナイチンゲール」、「サヨナキドリ」、「また秋が来て」

といったタイトルでも呼ばれているという。

以下に、2種類の日本語訳詞を載せる。

『キエフの鳥の歌』（訳詞：木内宏治）

果てなき空のかなた　いとしい鳥は飛ぶ
丘に一人たたずみ　過ぎにし日を思う
心にしみる鳥の声　白鳥よ鶴よ
やさしき人は今いずこ　教えておくれ

夜霧にしずむ森よ　ほの暗き谷間よ
うたごえ川面をゆく　わが思いを乗せて
鶴のうたごえによせて　とどけよ愛の歌
やさしき人は今いずこ　教えておくれ

『また秋が来て』（訳詞：中島章利）

また秋が…
遠い南へとまた
鳥たちはウクライナから飛び去っていく
高く渦を巻いて
はるかな旅路を行く

夜鶯（サヨナキドリ）の歌が消えた
流れていた空から
夜鶯の歌流れるウクライナは
その歌もなしに
どうやって暮らしていくのだろうか？

白鳥の歌が消えた
飛んでいた空から
白鳥の歌流れるウクライナは
白鳥の悲しい歌もなしに
どうやって暮らしていくのだろうか？

なお、「鳥の歌」というタイトルで想起されるのは、カタルーニャ民謡「鳥の歌」である。20世紀最大のチェリストであるパブロ・カザルスが、1971年に国連本部において平和を求めるメッセージとともに、演奏したことでよく知られている。本稿の変奏曲の主題はカタルーニャ民謡とは別の曲だが、「鳥の歌」であることで、パブロ・カザルスにまつわる有名なエピソードを関連付けることも意図の中にあった。

3．先行作品について

Kurt von Fischer, Paul Griffiths（1994）によれば、変奏という作曲技法や構成は、少なくとも1500年から存在していたとされる。ヨハン・ゼバスティアン・バッハ（1685～1750）以降、近現代に至るまで、数知れぬ変奏曲が作曲されてきた。モーツァルトやベートーヴェンの時代には、オペラのアリアなど当時の人々にとってよく知られていた曲が変奏曲の主題として使われた。ここでは、筆者が変奏曲「キーウの鳥の歌」を作曲するにあたって、先行作品として意識した2つの作品について簡単に触れておきたい。

・フレデリック・ジェフスキー作曲：「不屈の民」変奏曲（1975）

フレデリック・ジェフスキー（Frederic Rzewski 1938～2021）は、アメリカとヨーロッパで活動した作曲家・ピアニストである。「不屈の民」変奏曲の主題となった「不屈の民」は、チリの民主化闘争を象徴する革命歌として、セルヒオ・オルテガ（Sergio Ortega 1938～2003）と、チリのフォルクローレ・グループであるキラパジュン（Quilapaýun）によって1973年に作曲された。変奏曲は、その2年後の1975年に、アメリカのピアニスト、アーシュラ・オペンス（Ursura Oppens 1944～）のために作曲され、ジェフスキーの代表作となった。冒頭と結尾に主題が置かれ、36曲の変奏曲からなる。第1変

奏から、20世紀の作曲技法であるトータル・セリエールを思わせるテクスチュアが始まり、いずれの変奏も高度な演奏技術が求められる。高橋（1994）によれば、第13変奏ではチリの民俗音楽やイタリアの革命歌が、第26変奏ではハンス・アイスラーによる「連帯性の歌」（ベルトルト・ブレヒト作詞）が引用される。演奏時間は約50分～60分を必要とする。

・林光作曲：「ワルシャヴィアンカ変奏曲」（1982）

日本の作曲家林光（1931～2012）は、交響曲、室内楽曲などのほか、演劇や映画のためにも非常に多くの音楽を作曲した。また、オペラやソングの作曲を通して、歌詞が持つ意味や思想を日本語で的確に伝え、聴き手に届けることを創作の理念としていた。さらには、労働運動や平和運動にも積極的に関わった。

「ワルシャヴィアンカ変奏曲」の主題となった原曲は、帝政ロシアに対するポーランド独立闘争の歌である。その後、自由のために闘う人々を励ます歌として世界中に広まった。日本では「ワルシャワ労働歌」として知られる。1982年、軍政下で民主化の機運が高まるも、戒厳令が敷かれるなど弾圧が続いていたポーランドへの「緊急支援コンサート」のために作曲され、志村泉のピアノによって東京で初演された。主題と8つの変奏、コーダと終曲（主題）から構成されている。変奏の後半には、佐藤信作詞による林自身のソング「ねがい」「連帯について」、ショパン作曲ポロネーズ第6番変イ長調「英雄」の引用が見られる。ジェフスキー作品とは、主題の由来が近似していることなど、林はジェフスキーの作品を意識してこの変奏曲を作曲したのであろうと思われる。演奏時間は約12分。

4．作品について　概説と分析

前項で述べたように、西洋音楽史の範囲をバロックから近現代までに限ったとしても、変奏という作曲技法もしくは形式で、数多くの音楽作品が作曲されてきた。また変奏は、変奏曲という音楽形式を取らないとしても、主題の展開において欠かせない作曲技法である。

貴島（1980）は、変奏技法を次の3つに大別している。

1）装飾的変奏　2）性格的変奏　3）対位法変奏

長谷川（1953）は、3）を「バスを固執する變奏（及び、シャコンヌ・パッサカリア）」としているが、貴島（1980）が示す内容と大きな齟齬はない。また、諸井（1976）は類型化を避け、膨大な数の曲例を挙げ、ひとつひとつについて分析しながら、構造を論じている。ひとつの楽曲の中でも、装飾的変奏と性格的変奏は普通に混在し得る。

本稿が扱う変奏曲「キーウの鳥の歌」のほぼ全曲は、この大別に従えば、2）性格的変奏に属することになる。そして変奏の方法は、長谷川（1953）にある「テーマの部分的特徴だけを活用して、個々の變奏に強い性格的變化を與えていく」という記述が当てはまる。【譜例1】に、主題となった歌の全曲を示す。これは、ウェブページ掲載されている音源を筆者が採譜したものである。以下に述べるように、大半は、この歌の全体ではなく、主に14～15小節目（以下、主題動機と呼ぶ）を変奏する。なお、クラリネットパートの譜例は実音で表記する。

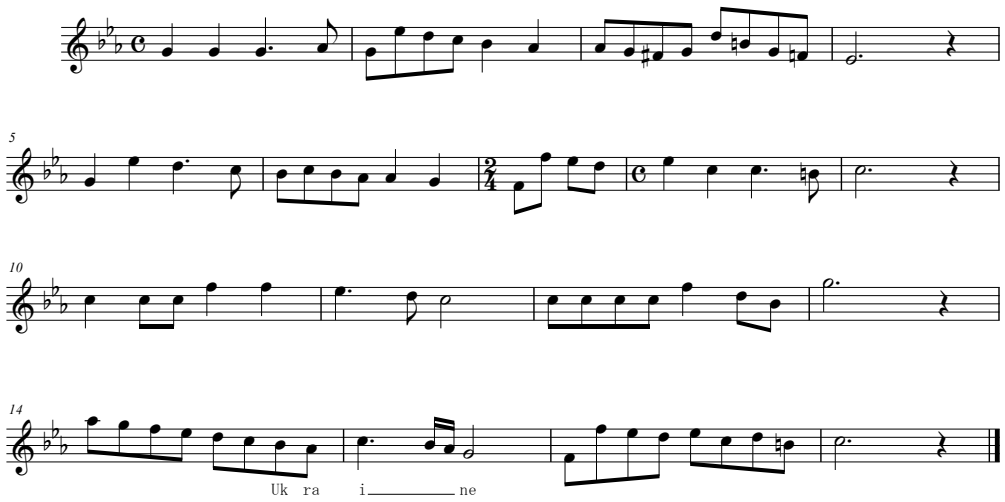
一般的に変奏曲は、冒頭に主題となる楽曲が提示され、装飾的な変奏、基になった楽曲の姿が聴き取りやすい変奏から始まったのち、次第に複雑化して、結尾ではフィナーレの性格を持った規模の大きい変奏に至り、そ

譜例1

キーウの鳥の歌（原曲）

ナイチンゲール、サヨナキドリ、「また秋が来て」

作曲　Oleksandr Bilash



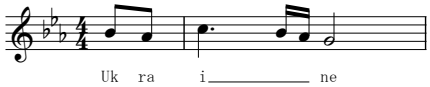
採譜　吉川 和夫

のまま曲を閉じる、あるいは主題が回帰して終わる。しかし、この作品では冒頭に主題を置かない。そして、変奏の数を追うごとに次第に複雑化するのではなく、曲の開始からですぐに性格的変奏が始まる。また、それぞれの変奏曲には曲の性格を表すタイトルが付されている。作品の全体は、7つの部分から構成される。以下、各部分を「楽章」と記す。ひとつひとつの変奏を独立した小品として意識して作曲したためである。

（1）Introduction

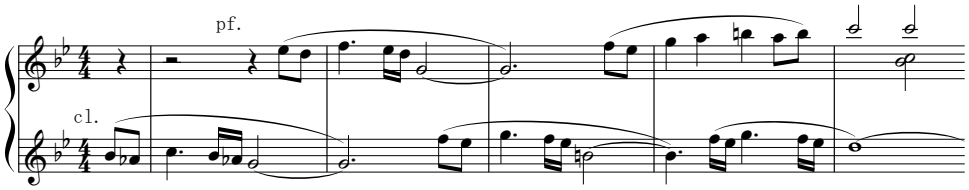
前述のように、変奏曲形式の定石を踏むのであれば、第1曲は主題となる楽曲が原型のまま提示されるが、ここで提示されるのは原曲の全曲ではなく、主題の14～15小節目（主題動機）であり、原曲では“Ukraine”と国名が歌詞として歌われる部分である【譜例2】。この主題動機の初めの4つの音は、ひとつの音（この場合はb音）の上下に揺れる連続刺繍音となっている。

譜例2



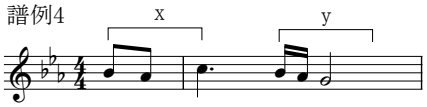
曲の冒頭は、【譜例3】のように、クラリネット（cl.）とピアノ（pf.）が最初の音程を変えながら、カノン風に呼び交わす。

譜例3



主題動機は、次第にｘとｙの２つの部分動機に分かれて変奏される【譜例４】。ｙは、下行する３度音程を含んでいる。

譜例4



この楽章では原曲の全体像は提示されず、変奏曲全体の導入部となっている。

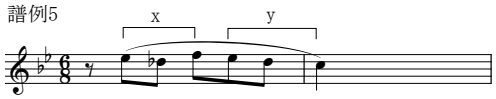
構成は、次のとおりである。［数字は小節番号、＋は弱起を伴うことを示す。小節番号の後の括弧つき数字は、その部分が何小節であるかを示す。なお、小節番号は、全曲通して付されている。］

＋１～８（8）
＋９～14（6）
＋15～20（6）

（２）Fantasia

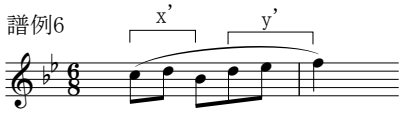
８分の６拍子に転じ、基本となる音価は８分音符となる。【譜例５】のような６つの音がひとつのフレーズとなって、流れを形作る。

譜例5



23小節目のクラリネットのフレーズ【譜例６】は反行形であり、ここからは原形と反行形が交互に現れる。

譜例6



全体は大きく２つに分かれ、後半部分はさらに下位区分される。

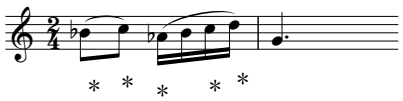
21～35（15）
36～59（24）
　36～43（８）
　44～49（６）
　50～59（10）

50小節目から５小節間は、この楽章の変奏形のリズムを残しつつも、自由なファンタジーを展開する。55小節目からは元の流れを取り戻しつつ、この楽章を閉じる。

（３）Interlude

この楽章では、主題動機の反行形が扱われる【譜例７】。ｂ音を軸に、主題動機から音程を反行させた音を＊で示す。

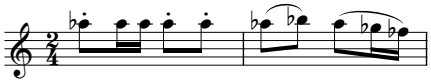
譜例7



この動機は、スタッカート付きの同音連打

と、それに続く3度音程下行を含む動機が加わって、フレーズ化される【譜例8】。譜例8の2つ目の小節後半に見られる［as-ges-fes］の3度音程の下行は、部分動機yに由来するものである。

譜例8



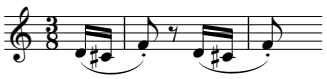
構成は、60～70（11）、71～84（14）、85～102（18）となるが、3つの部分で起きることに大きな変化はない。しかし、各部分は次第に長さを増し、3つ目の部分ではクラリネットに高音が現れ（91小節目～）、音勢も増す。この変奏で何かを表現し尽くすことはなく、次へのブリッジとしてのInterlude（間奏）である。

（4）Scherzando

Scherzandoは、一般的に「諧謔的に、軽妙に、おどけて、戯れるように」といった意味で用いられるが、この変奏は一種の悪魔的なTotentanz（死の舞踏）である。

部分動機xが、yとは切り離され、単独で変奏される【譜例9】。第2と第3の音は、必ずしも3度音程をなさない場合が多く、そのため第1の音（この場合はd音）を軸とはするものの、連続刺繍音としての機能は弱められている。なお、この楽章を通しての中心音はg音である。

譜例9



練習番号で区切られた部分が、曲の構成を示している。

＋104～125（22）提示部　この変奏の性格が示される。

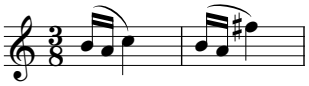
126～137（12）推移1　g音が中心音となり、波打つようなフレーズの起伏と同音連打が交互に現れる。

138～146（9）推移2　130小節目からピアノの下声部に現れたフレーズ（主題動機に由来する）がクラリネットに移り【譜例10】、音域を広げ、146小節目で極点を形作る。

＋147～157（11）推移3

＋158～178（21）推移4

譜例10



動機が展開され、164小節と171小節で2度の極点を作り、最後の8小節ではg音の連打で、沈静化していく。

＋179～204（26）再現部　＋104からの曲想を再現するが、提示部とは異なり、201以降が加わって、緊張感を高める。

＋205～218（14）コーダ　緊張感を維持し叩きつけるように終止する。

（5）Romance

冒頭のフレーズを【譜例11】に示す。部分動機xが、原曲の抒情的な性格を示唆している。4つの音からなるzも、部分動機として変奏要素に加わる。

236～237では、原曲の14～15小節目がはっきりと姿を現す【譜例12】。

主部は219～237（19）であり、238～247（10）は終結部。242からの6小節は、この楽章冒頭を回想する。

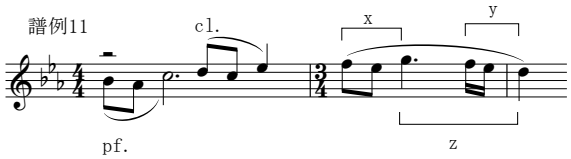
（6）Choral

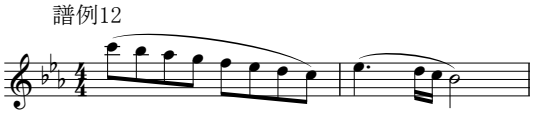
【譜例13】に示した3度音程下行は、部分

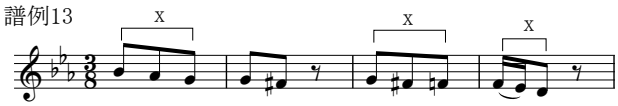
動機ｙに基づいている。ピアノが和音を伴ったホモフォニー的な動きを繰り返す上に、クラリネットは比較的自由に、単旋律を奏でる【譜例14】。

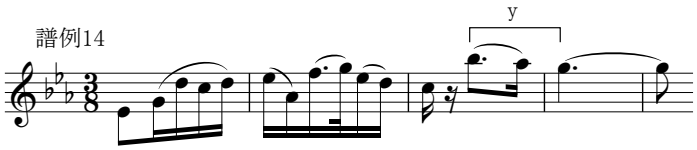
264小節、276小節のクラリネットに現れるフレーズは、部分動機ｘに由来する連続刺繍音で構成されている【譜例15】。

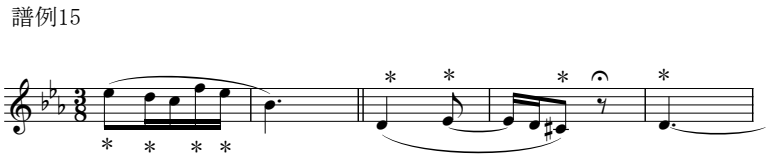
この楽章は248～283（36）で、練習番号18と19に部分の切れ目はあるものの、全体は大きく区切られることなく奏される。











（7）Nightigale

冒頭10小節は前奏である。294から、この作品で初めて原曲のすべてが姿を現す。ただし、はじめはクラリネットとピアノがつぶやくように切れ切れに呼応する。やがて両者は寄り添い、原曲で“Ukraine”と歌う歌詞の部分がユニゾンで強調される。変奏主題は楽曲全体（第1楽章）の冒頭には示されず、最後に姿を現す。いわば逆回しのような変奏曲である。

5．まとめと課題

初演を聴いた聴衆のひとりから「時間を追うごとに、色が現れてきた」という感想をもらった。冒頭に主題の全曲を置かず、最後に近づくに従って主題の要素を少しずつ提示し、最後に全貌が現れるようにするのは、当初の設計であったので、この感想は作曲のねらいが伝わったことを示唆している。

先行作品として掲げたジェフスキーと林の作品は、知識人や芸術家のアンガージュマンという文脈の中で語ることもできよう。この「キーウの鳥の歌」変奏曲は、アンガージュマンとまでは言えないまでも、この時代（2022年）に特別な意味を持った歌を原曲として変奏曲を作曲するということそのものが、筆者を作曲という営為へと向かわせた。

音楽の形として、変奏ひとつひとつにタイトルを付けて、それぞれの変奏の性格を明確に提示することは、変奏曲としてはあまり類例がない。このような方法は、変奏曲のあり方として可能性を感じる。ただ、変奏の音楽的な質とタイトルとの間で、ややストレスが生じたことも否めない。そのため、タイトルなしに変化に富んだ変奏が次々と繰りだされてくるダイナミックな変奏曲ではなくなった。「主題に基づく性格的な小品」といった呼称の方がふさわしいかも知れない。

変奏は、アイデアと技術が試される基本的な作曲技法である。「キーウの鳥の歌」変奏曲の作曲と分析は、今後作曲活動を続ける上で、その重要性を再認識できた経験になった。

付記：楽譜が完成した時点では、（5）Choralと（6）Romanceの順序を逆に置いていたが、初演のリハーサルの過程で演奏者と相談して、（5）Romance、（6）Choralとした。Romanceでは原曲の一部がはっきりと現れるため、原曲を提示する（7）Nightingaleと近づきすぎるのを避けるためである。

参考文献

［事典項目］

Aristide Wirsta, Vodymyr Hoshovsky「ソヴィエト連邦　X．ウクライナ」（1994）（伊東一郎、森田稔訳）『ニューグローヴ世界音楽大事典 第9巻』、講談社、pp.585-589

Kurt von Fischer, Paul Griffiths「変奏（曲）」（1994）（角倉一朗、茂木一衛訳）『ニューグローヴ世界音楽大事典 第16巻』、講談社、pp.442-456

筆者不詳「キエフの鳥の歌」『世界の民謡・童謡』、https://www.worldfolksong.com/songbook/russia/kiev-bird-song Webpage（2023年1月10日最終閲覧）

北海道合唱団 https://hokkaido-chorus.info/（2023年1月10日最終閲覧）

うたごえサークル「おけら」https://bunbun.boo.jp/okera/kako/kief_tori.htm（2023年1月10日最終閲覧）

［楽式について］

長谷川良夫（1953）「第九章　變奏曲」、『作曲法教程 下巻』、音楽之友社、pp.568-582

フーゴー・ライヒテントリット（1955）「第六章　主題と変奏曲」、橋本清司訳『音楽の形式』、音楽之友社、pp.82-94

諸井三郎（1976）「第十七章　変奏曲」、『音楽構造の研究　下巻』、音楽之友社、pp.1041-1162（この書が出版されたのは1991年）

貴島清彦（1980）「第十一章　変奏曲形式」、『音楽の

形式と分析』、音楽之友社　pp.323-361
［楽譜・CD］
ジェフスキー（1979）『「不屈の民」変奏曲』全音楽譜出版社
林光（1986）「ワルシャヴィアンカ変奏曲」、『林光ピアノ作品集　木々について』、全音楽譜出版社、pp.81-103
林光（2002）『林光・歌の本Ⅳ　ことに寄せる歌』、一ツ橋書房
『フレデリック・ジェフスキー「不屈の民」変奏曲』、高橋悠治（ピアノ）、ALCD19 コジマ録音（1994）
「ワルシャヴィアンカ変奏曲」志村泉（ピアノ）、『林光の音楽』CD：SHM 5、小学館（2008）

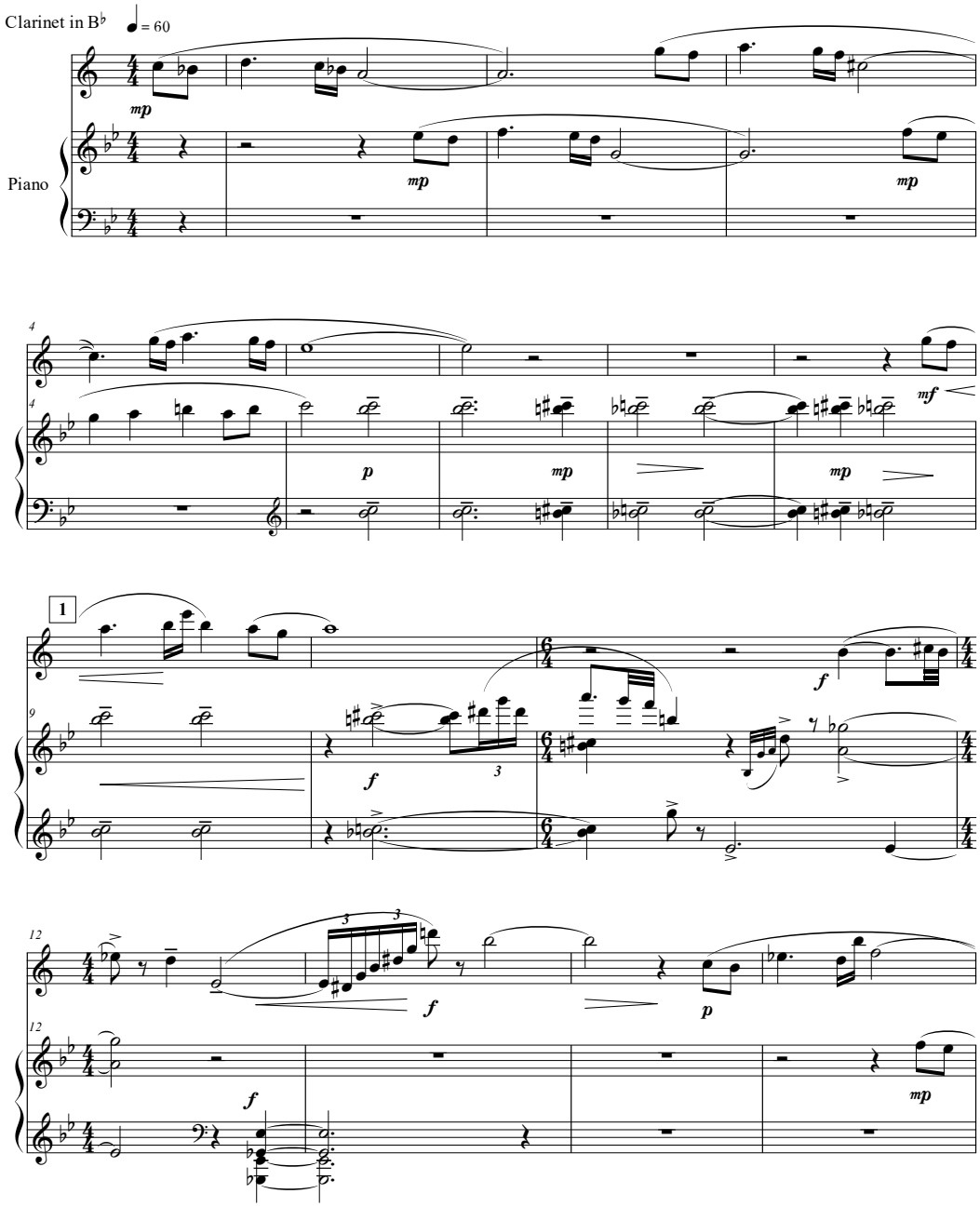
Score

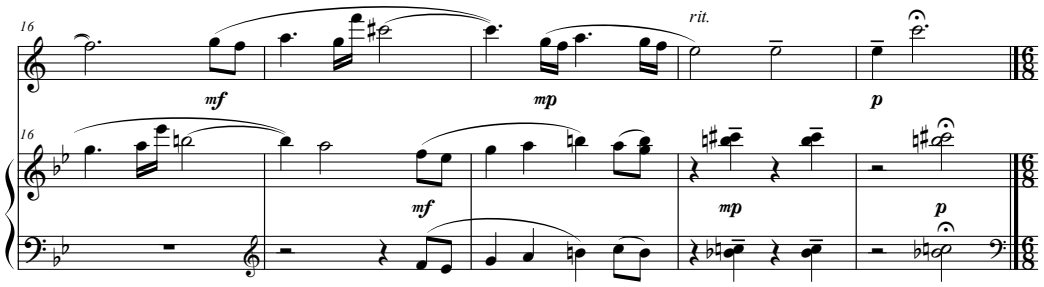
変奏曲「キーウの鳥の歌」

クラリネットとピアノのための

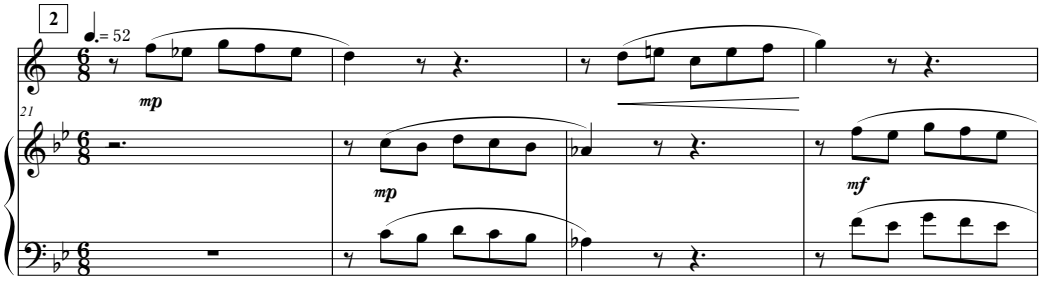
KIKKAWA Kazuo(2022)

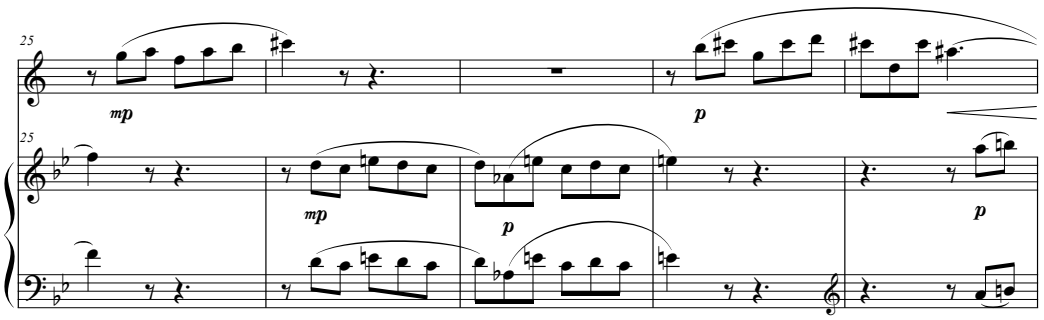
Ⅰ. Introduction

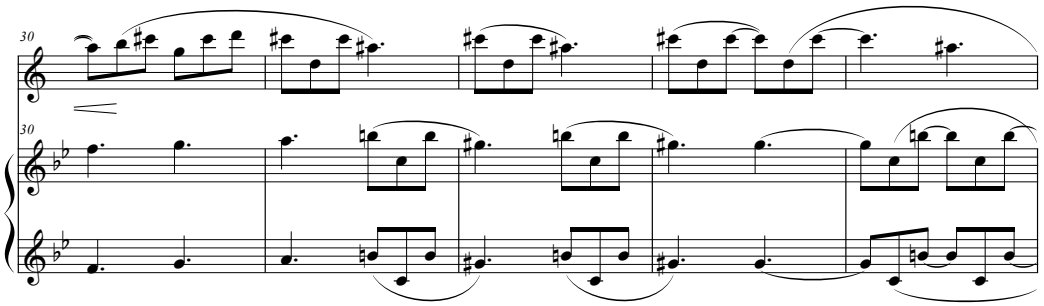


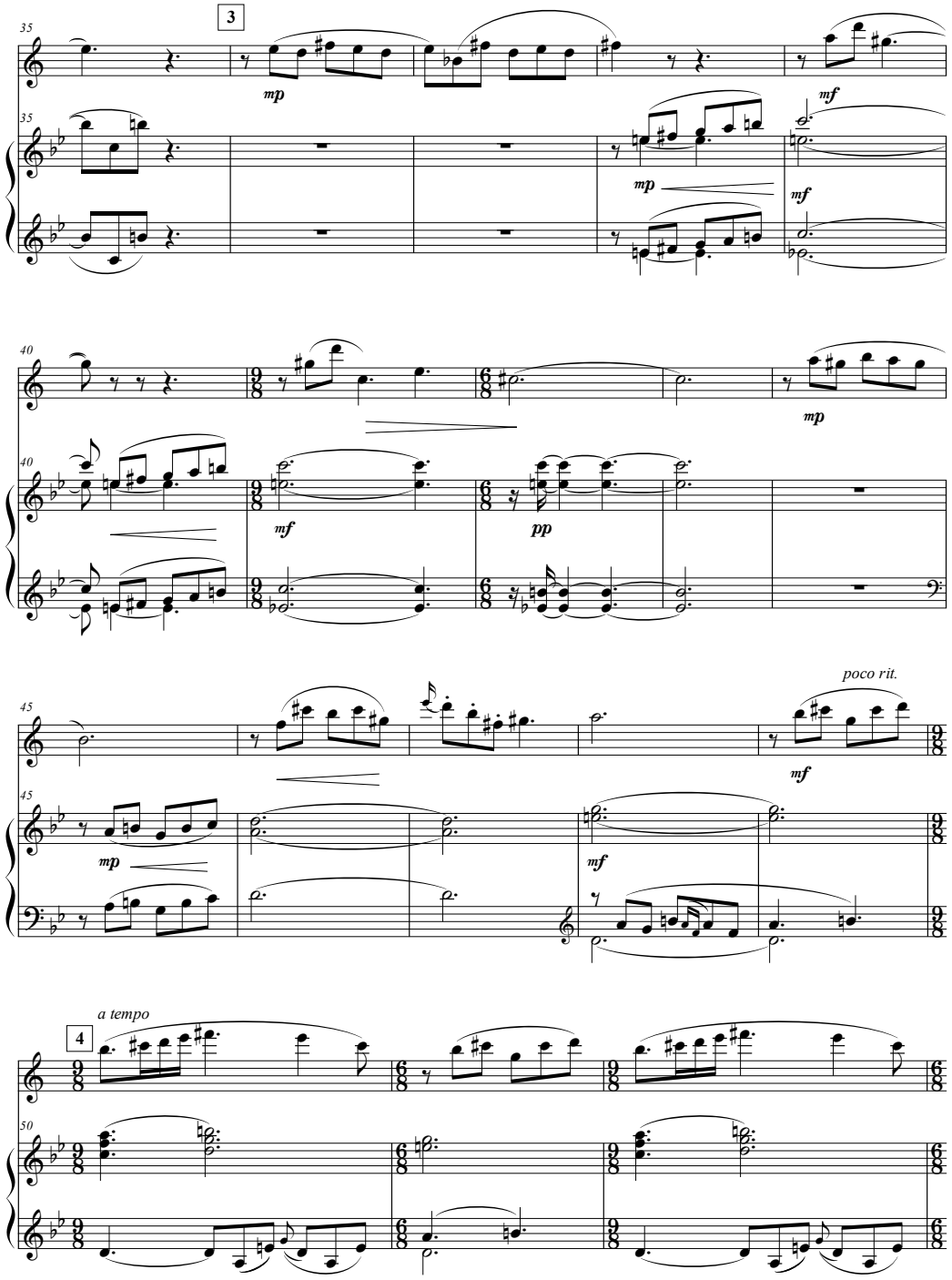


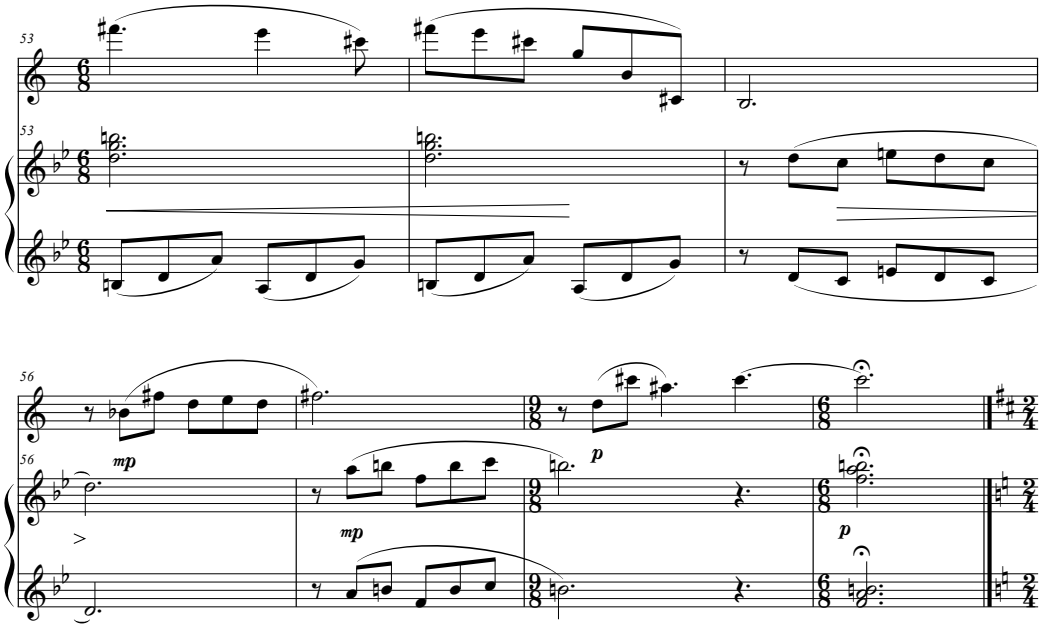
Ⅱ. Fantasia



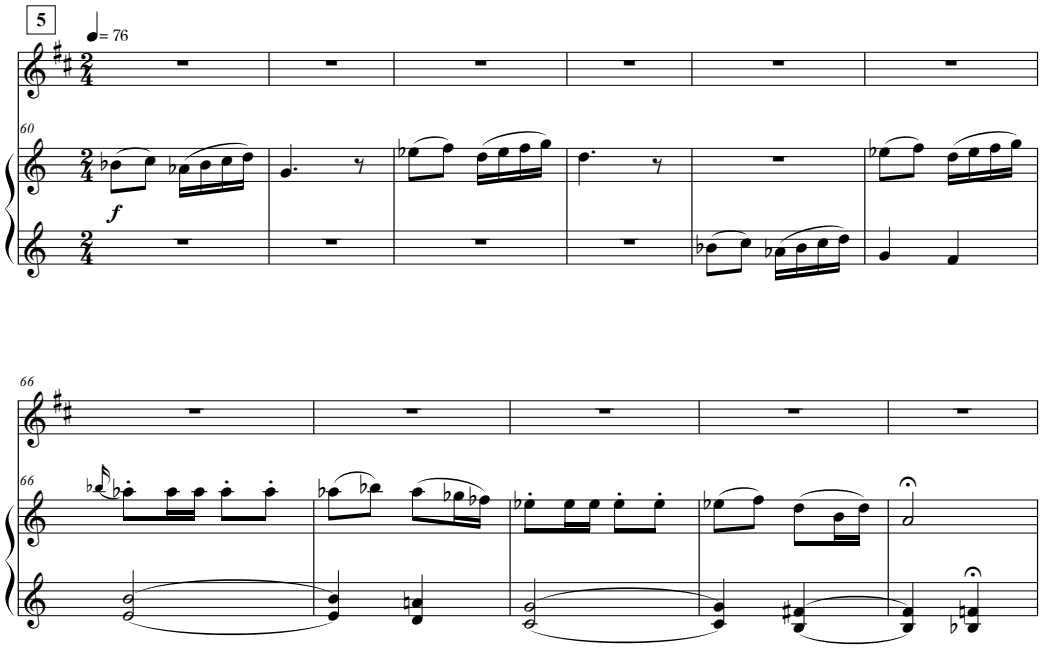


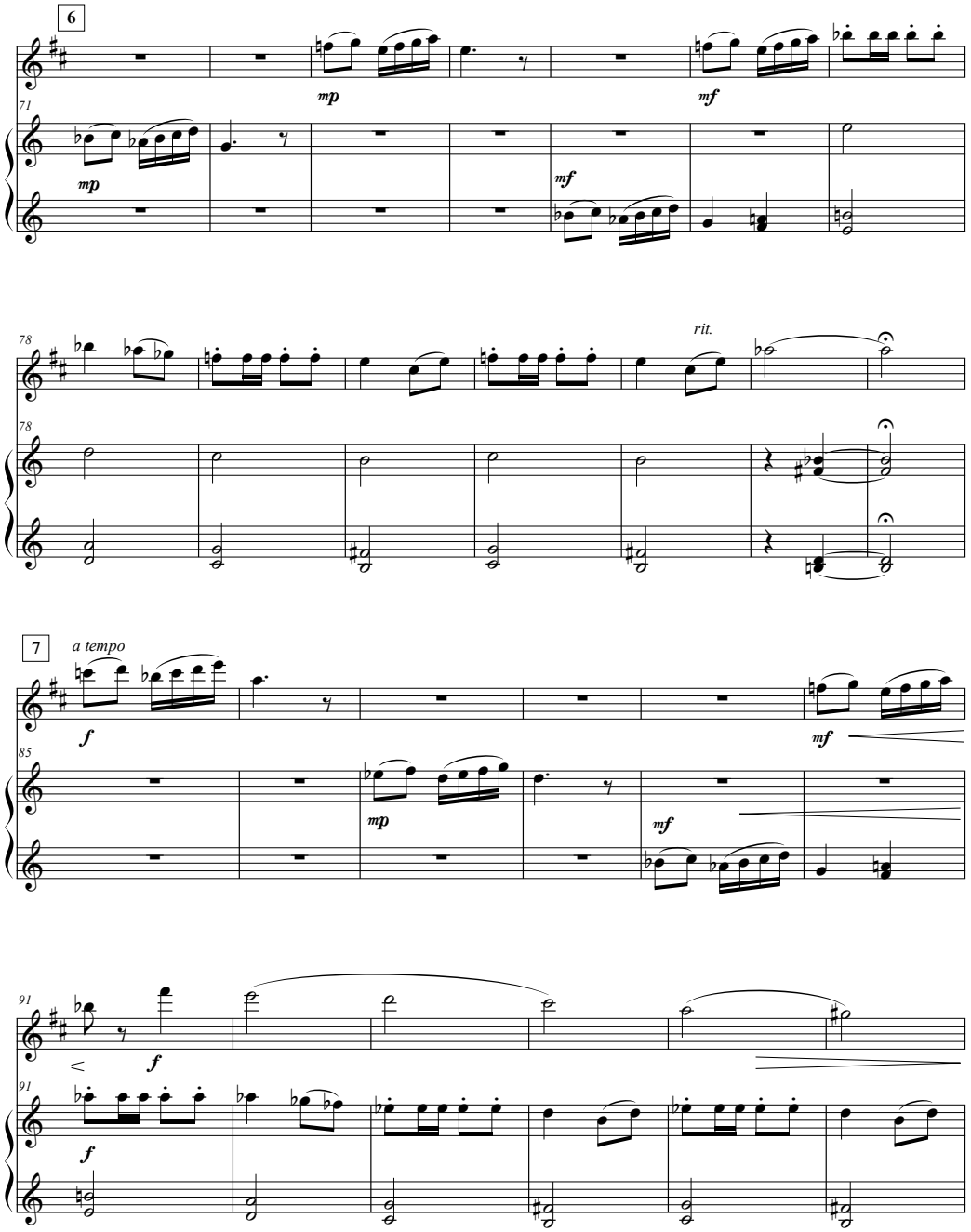


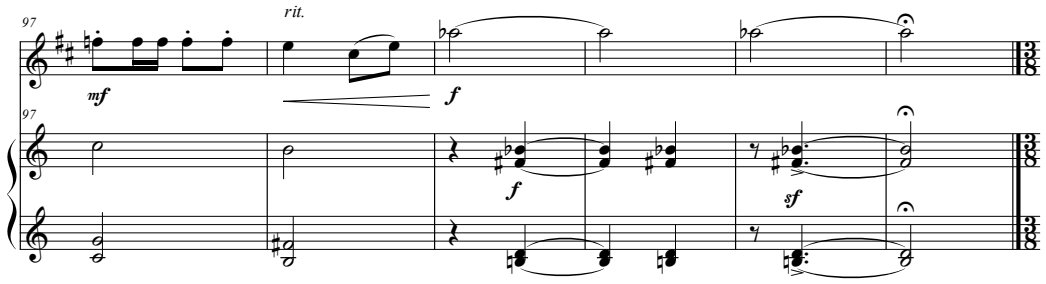

3
mp
mf
mp
mf
mp
mf
pp
mp
poco rit.
mf
mp
mf
a tempo
4



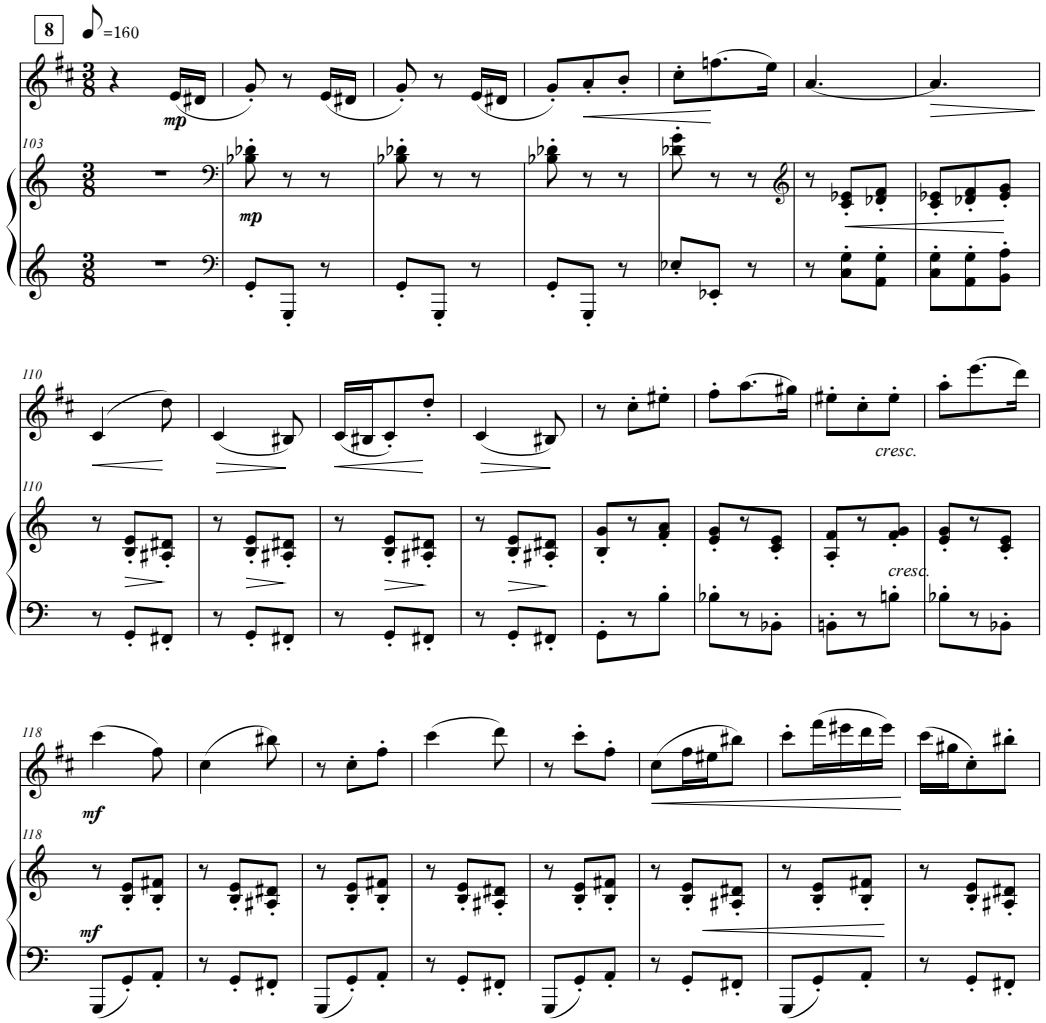
Ⅲ. Interlude

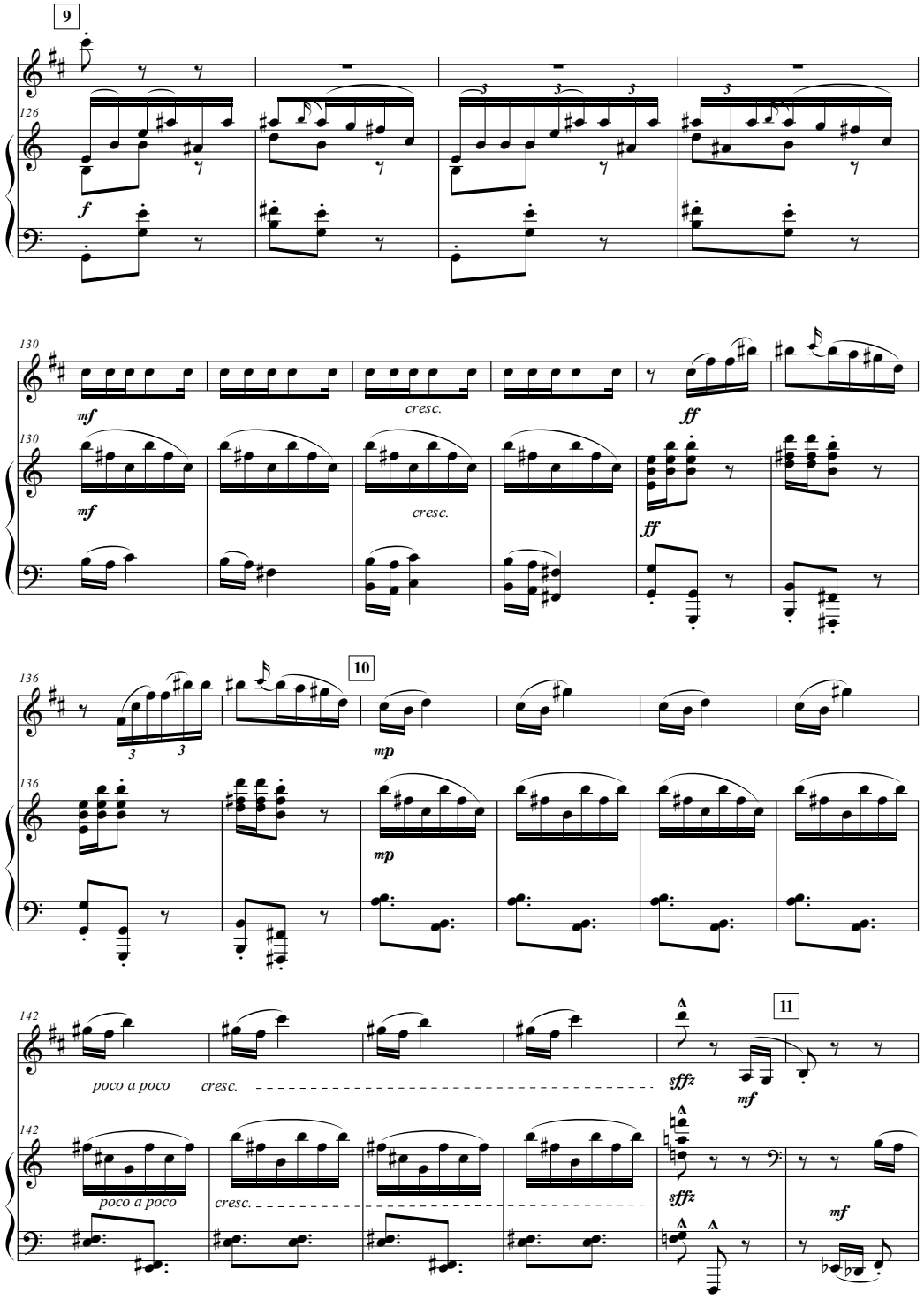


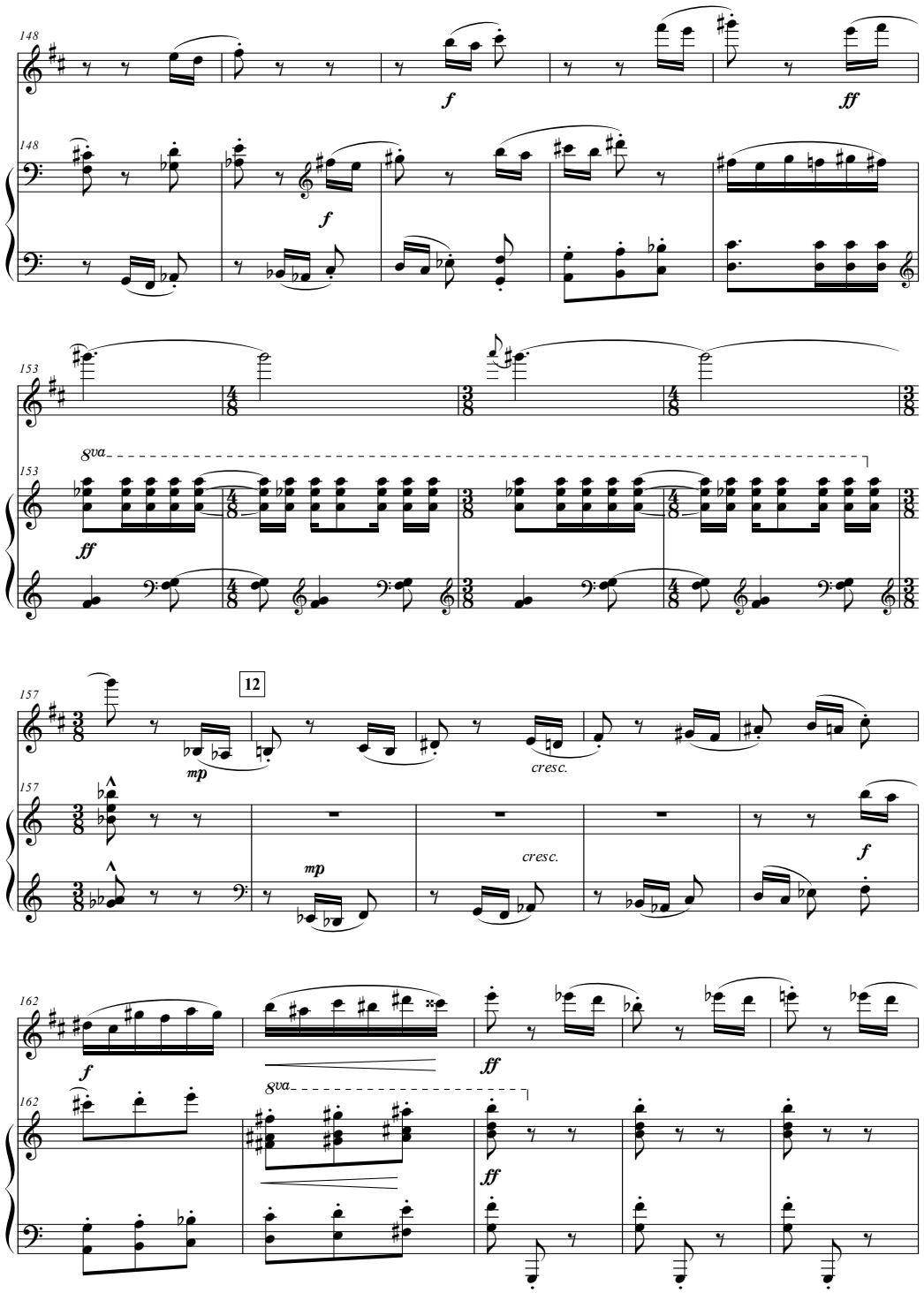

6
mp
mf
71
mp
mf
78
rit.
78
7
a tempo
f
mf
85
mp
mf
91
f
91
f

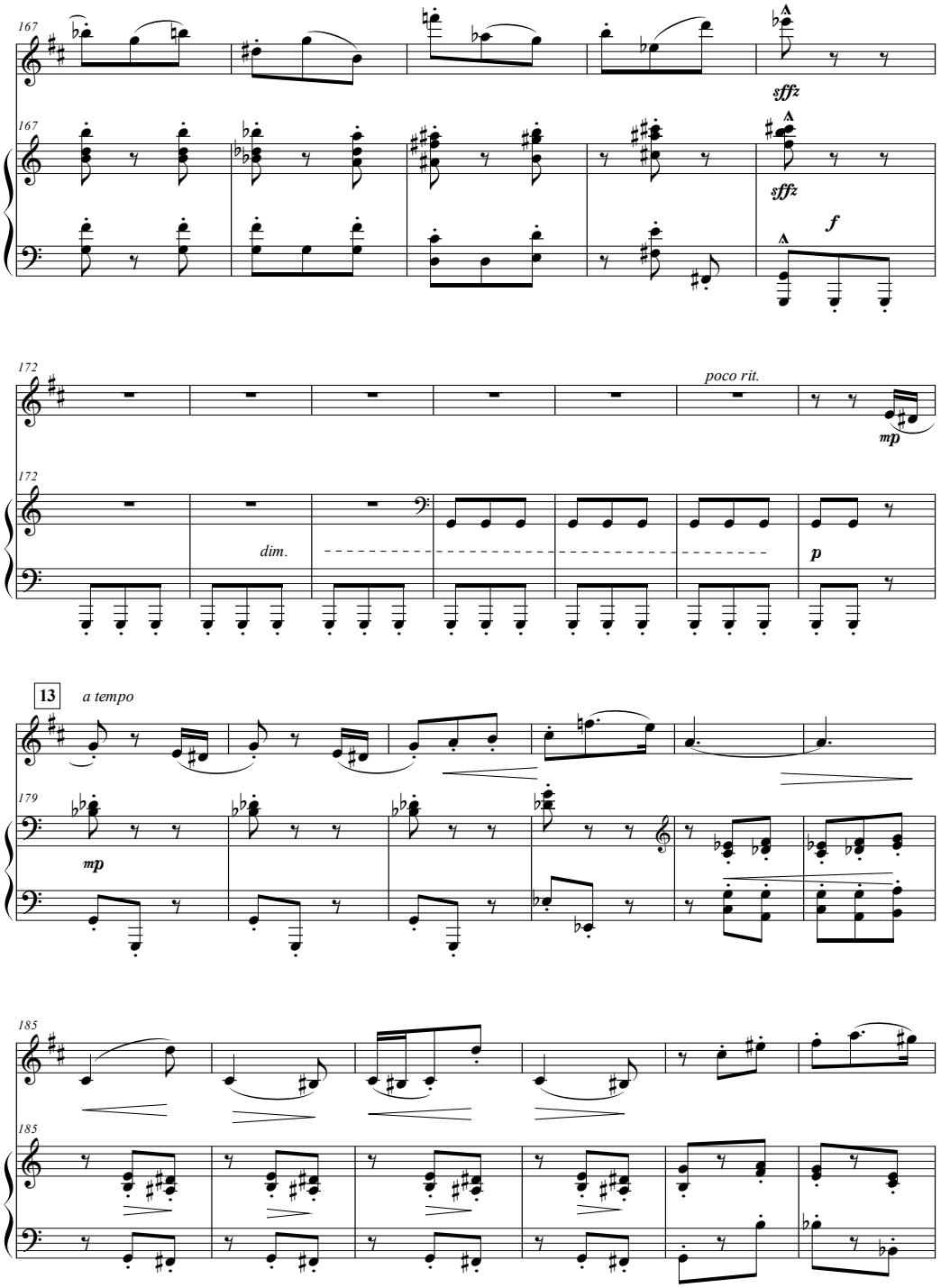


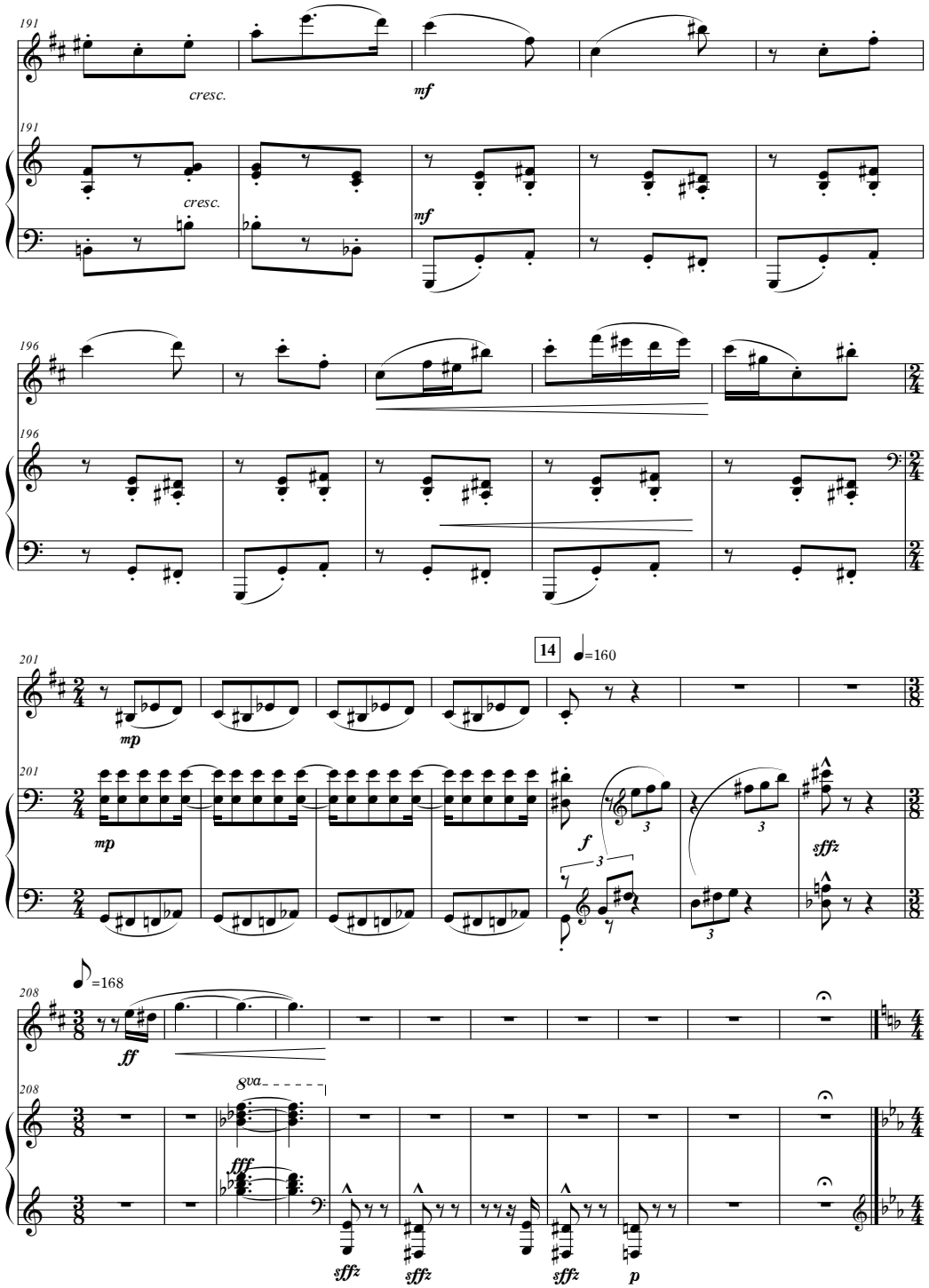
Ⅳ. Scherzando



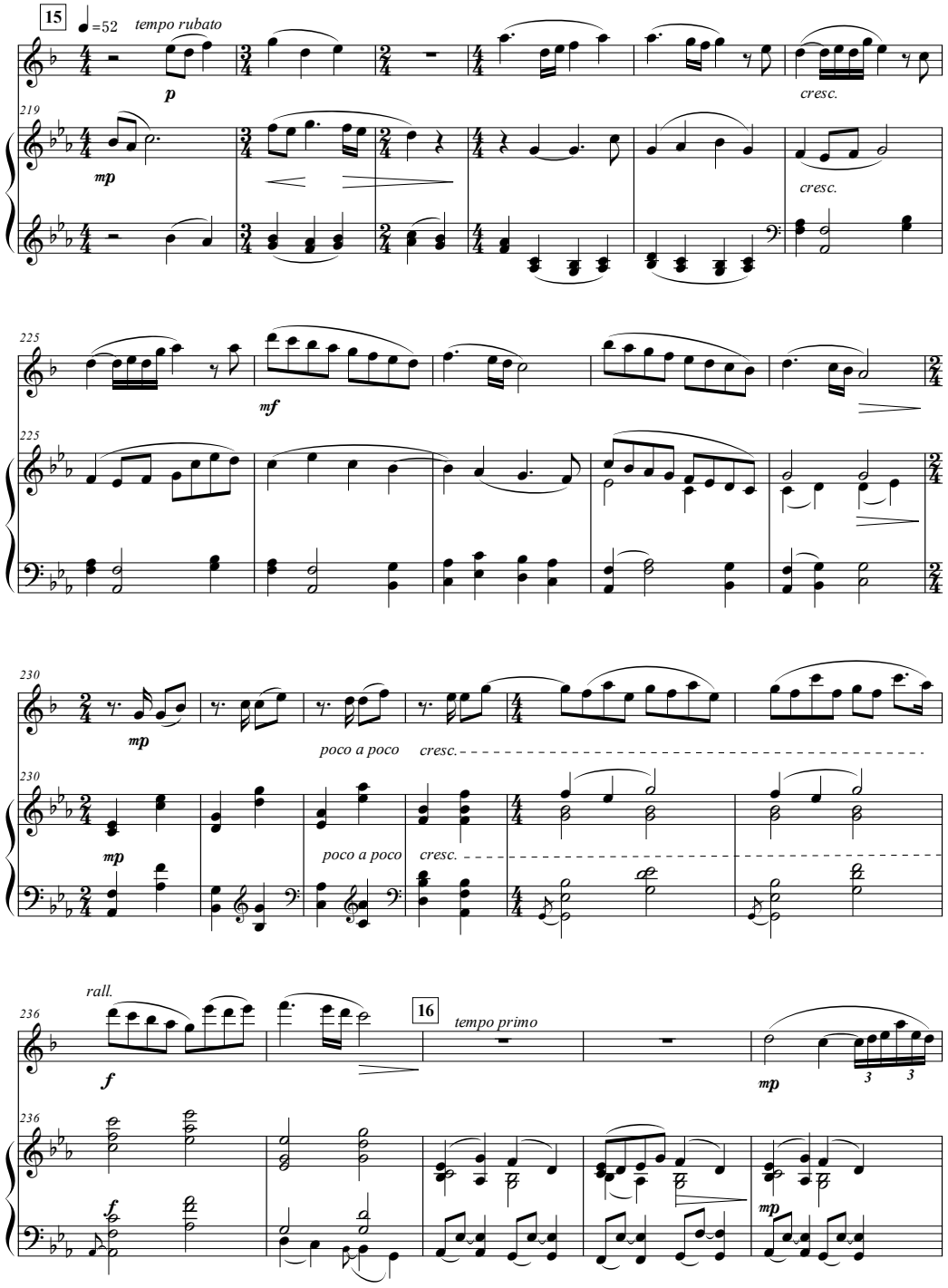

9
126
f
130
mf
cresc.
ff
130
mf
cresc.
ff
136
10
mp
136
mp
142
poco a poco
cresc.
sffz
11
mf
142
poco a poco
cresc.
sffz
mf

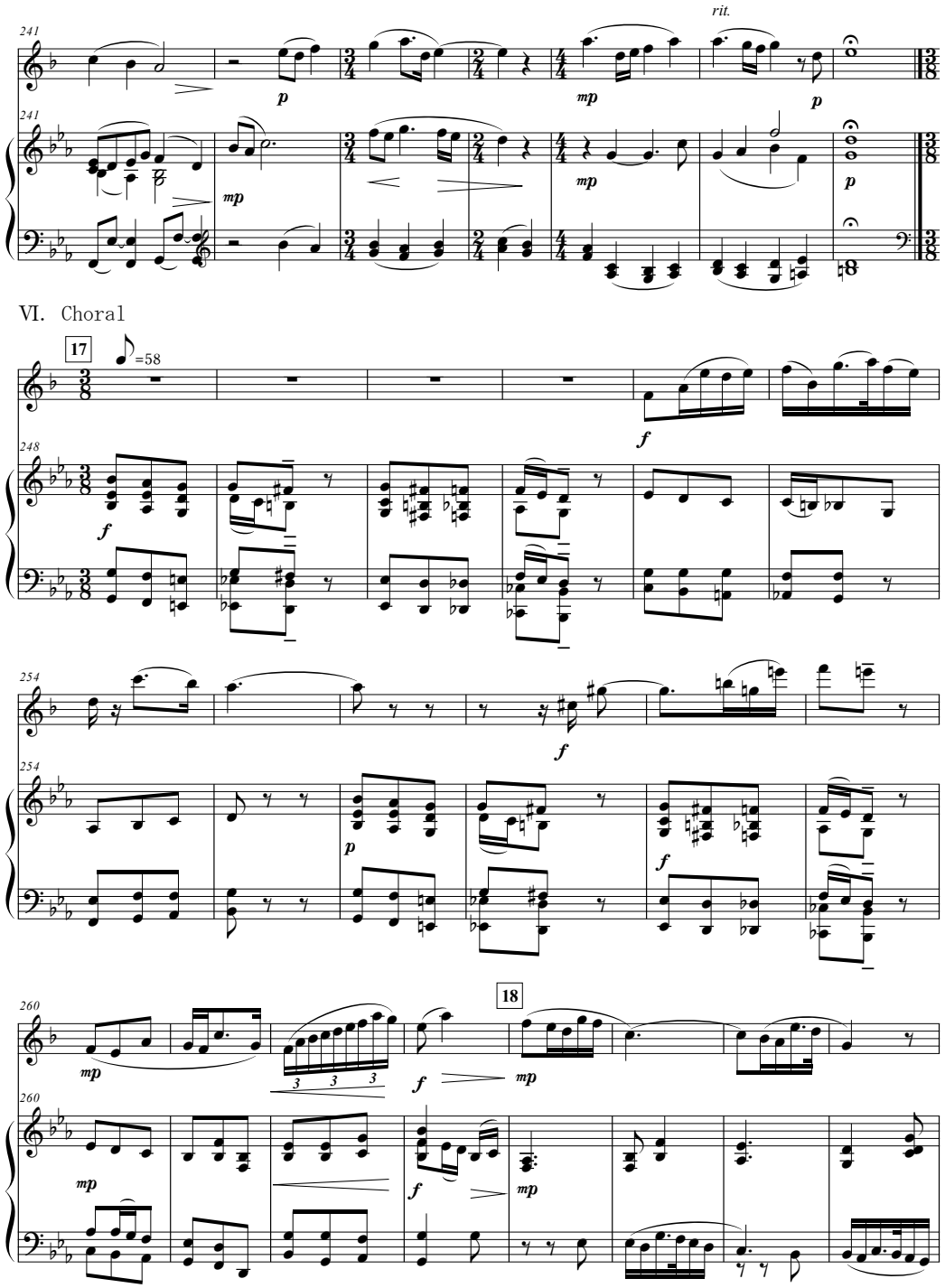

148
f
ff
148
f
153
8va
153
ff
157
12
mp
cresc.
157
mp
cresc.
f
162
f
ff
162
8va
ff

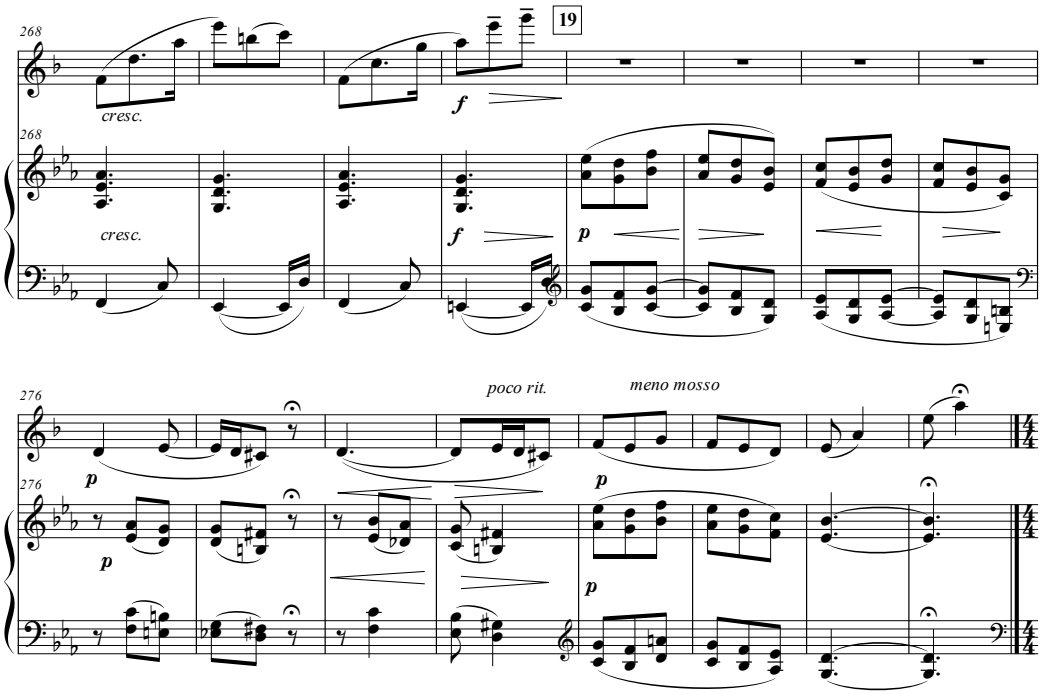

167
sffz
sffz
f
172
poco rit.
mp
dim.
p
13
a tempo
179
mp
185


191
cresc.
mf
191
cresc.
mf
196
196
201
14
=160
mp
201
mp
f
sffz
208
=168
ff
208
8va
fff
sffz
sffz
sffz
p

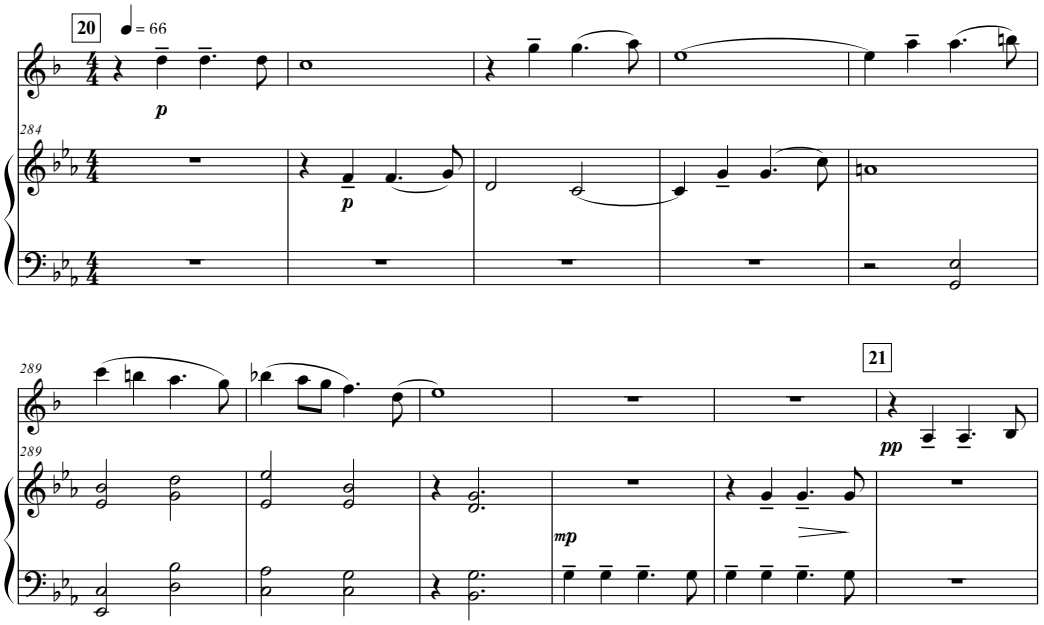
V. Romance

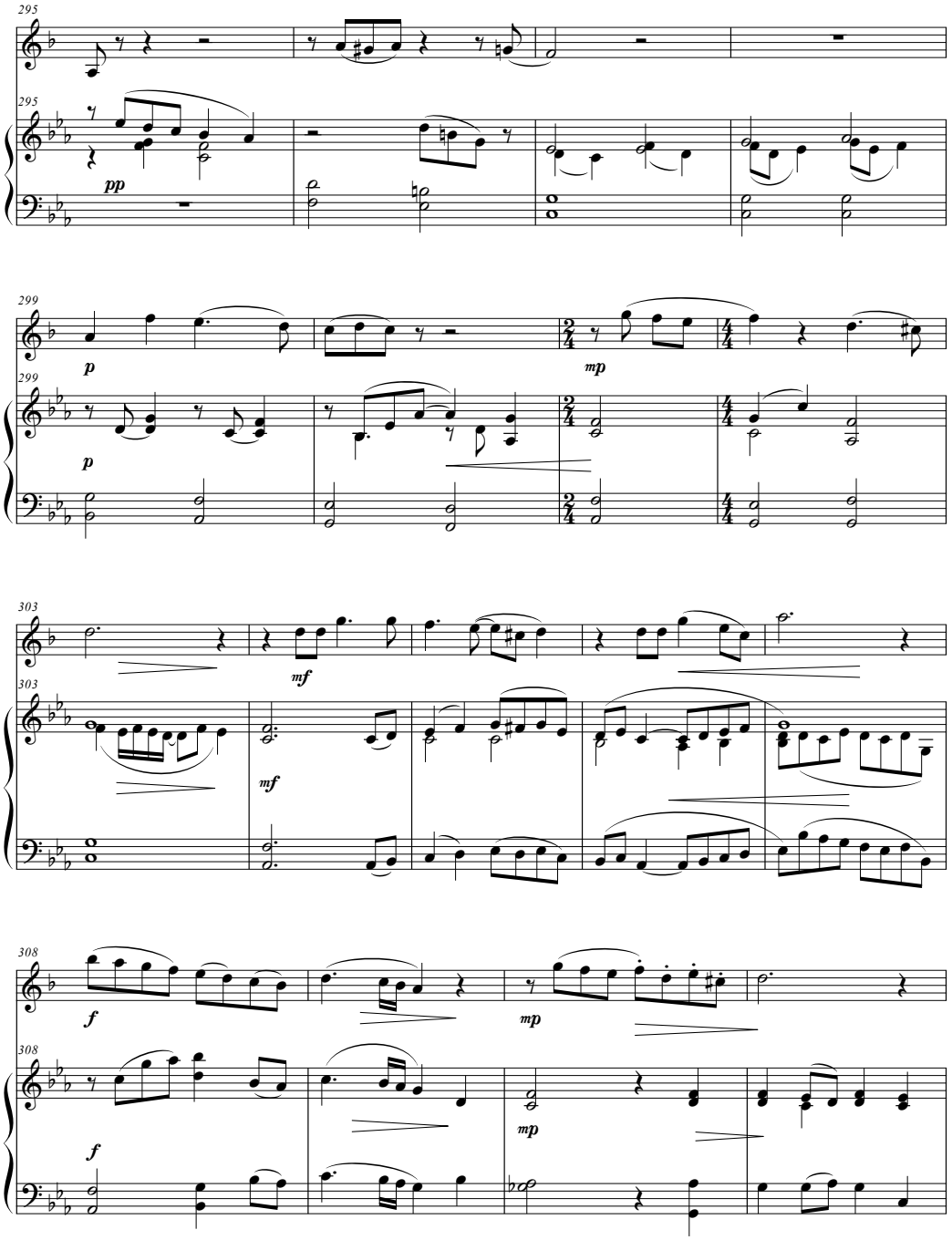

15
♩=52
tempo rubato
p
cresc.
219
mp
cresc.
225
mf
225
230
mp
poco a poco
cresc.
230
mp
poco a poco
cresc.
236
rall.
f
16
tempo primo
mp
236
f
mp

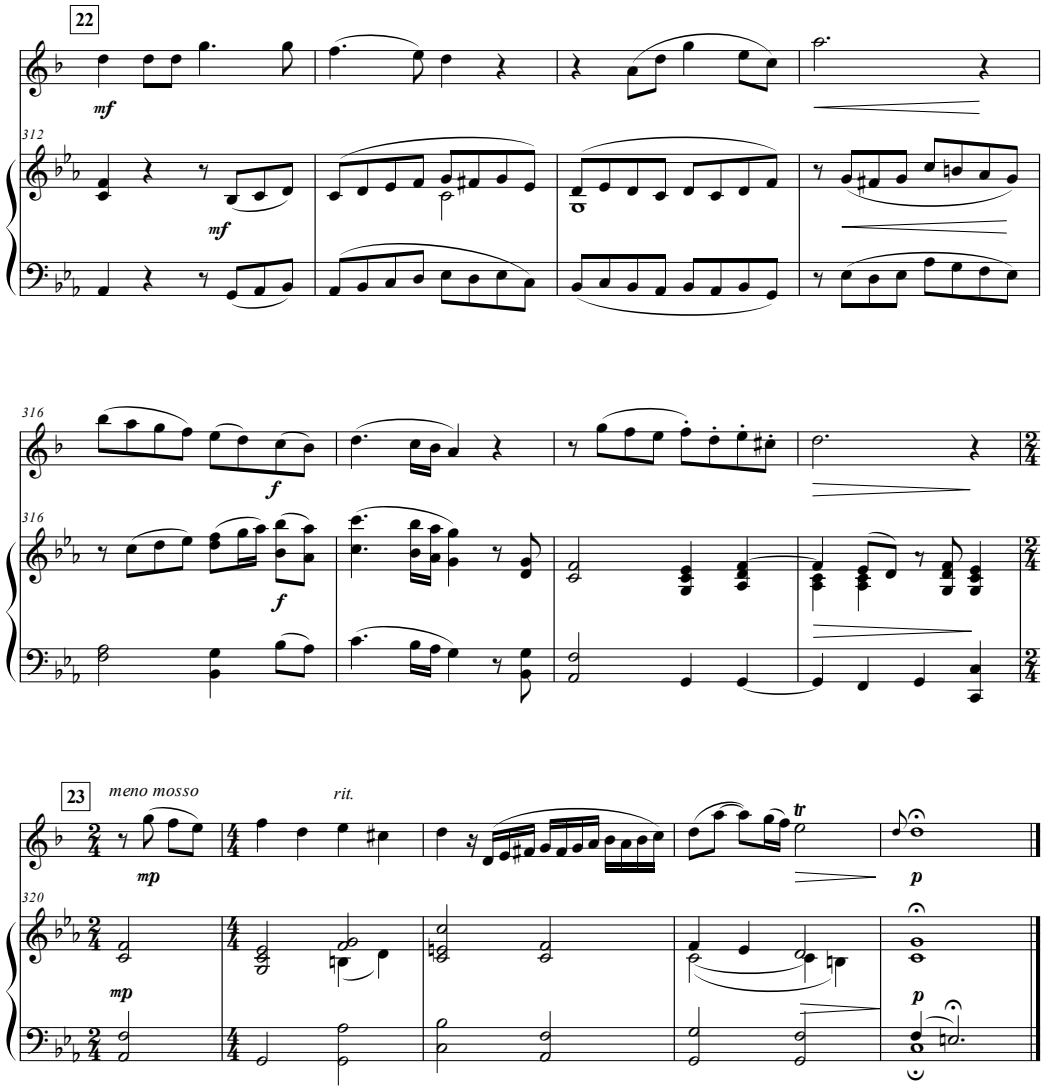

241
rit.
p
mp
VI. Choral
17
=58
248
f
254
p
260
18
3 3 3



Ⅶ. Nightingale




295
295
pp
299
p
299
p
mp
303
mf
303
mf
308
f
308
f
mp
mp


22
mf
312
mf
316
f
316
f
23
meno mosso
rit.
mp
tr
p
320
mp
p